

日本学術振興会 研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）

中間評価（平成31（2019）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 東京大学生産技術研究所（教授・金 範ジュン）

研究交流課題名 日欧先進臨床医工学連携研究拠点

評価結果（総合的評価）	
S	想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。
○ A	想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。
B	ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。
C	成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。
所見	
<p>本研究交流課題では、BioMEMS技術を中心としたバイオテクノロジーや医療技術、生命現象の理解の深化に至る優れた取り組みが進められ、対面での交流が厳しく制限された時期でも創意工夫により、研究連携・教育プログラムを開催している。相手国における共同研究拠点の形成や相互的な技術交流により、新たな国際共同研究のための拠点形成がなされつつある。</p> <p>一方で、その成果に基づく論文はわずかである。国際共著論文は初年度4本、次年度2本出ているが、各国にポスドク以上の参加者が一定数以上いる割には少ないと言わざるを得ず、国内外での会議における共同発表も皆無という状況である。研究交流活動からフランスの研究支援事業に採択されるなど波及効果も認められることから、今後は共同研究が成熟する前の早い段階での相手国との国際共同発表や研究交流の成果としての国際共著論文発表をより積極的に行うことが望まれる。</p> <p>若手研究者育成については、コロナ禍で移動制限のある中でも、オンラインのミーティング等を活用して、若手研究者同士の交流を図るように工夫されており、重要な人材育成、連携の場を醸成した点については高く評価できる。特に当該分野で重要な実践的研究タスクを詳細に検討し、教育プログラムへ取り入れているなど、身をもって多様な知識を身に着けるスクールを力強く推進していることは特筆すべき点である。若手研究者のネットワーク構築も図られており、若手研究者による共同研究のマッチングも見られることから、今後共同研究の更なる進展が期待される。</p>	